



湯浅 誠さん

1969年生まれ。東京大学大学院政治学研究科博士後期課程単位取得退学。著書「本当に困った人のための生活保護申請マニュアル」「貧困襲来」「反貧困 | 滑り台社会からの脱出」など。

湯浅 誠さんに聞く

もはや、「働いているのに食べていけない」という相談は珍しくないし、賃貸アパートに住んでいる人たちの間にも貧困は広く深く浸透している―著書「反貧困」（岩波新書、大佛次郎賞）で湯浅誠さんは指摘した。

年越し派遣村村長、反貧困ネットワーク事務局長、自立生活サポートセンターもやい事務局長として貧困問題の克服の先頭にたって活躍されている湯浅誠さんに語ってもらった。

貧困問題を見据えることは必然的に社会の構造、政治・国の形を問うことになる、自己責任の強調が貧困を見えなくさせている・・・10数年間、社会的に排除され、野宿生活を余儀なくされてきた人たちの支援活動が続けてきた湯浅さんだからこそ見えてきた実態、貧困に至る過程、なにを変えるべきかが語られ、その中身が私の胸にすくと落ちた。

学校現場でも「こどもの貧困」にどう向き合うかはいまや避けて通れない現実がある。

―聞き手 白鳥 勲（さいたま教育文化研究所事務局長）

「なぜ、「野宿」の方や生活困窮者への支援組織「もやい」の活動を。」

湯浅 きつかけらしいきつかけはないです。友だちがホームレスの方たちへの支援活動をやっていて、ここにときどき手伝いにいくようになりまして。そして、いつの間にか「もやい」の活動に参加していたんです。1995年から2000年頃まで渋谷にへばりついて野宿の人たちとつきあっていました。酒飲んだり、一緒に泊まったりしてよく話をしました。2003年で大学院を「追い出されて」今後のことを考えざるをえなくなりました。他に生活の糧をもとめて、例えば塾の講師やりながら活動するのか、活動そのもので食ってゆくのとか。貧困の問題と正面から向き合うには活動そのもので生活しないと中途半端になると思っています。活動そのものを生活とすることに決めました。仕事は「引越し業」みたいな便利屋です。1年目は年収100万円、2年目は200万円くらいで一番生活がきつかったときです。

私が活動を始めたときは、野宿の生活に入って1ヶ月の人から3年ぐらいの人まで、前歴もいろいろな人がいました。日雇い、新聞配達、正社員だった人など。

家族の支え、福祉制度の知識がない

からは「働いていながら生活ができない」人たち―日雇い派遣労働者など―も出現しました。その人達と共に生活してきて見えてきたのは様々なセーフティネットから排除されているということです。私はそれを5重の排除といっています。貧困状態に至る背景には5重の排除があります。

第1は教育課程からの排除。家庭環境が劣悪だったり、高校にいけず低学力状態になっている人たち。この背後には親世代の貧困がある。

第2は企業福祉からの排除。非正規雇用が典型です。低賃金で不安定雇用というだけでなく、雇用保険・社会保険にいれてもらえず、失業時の立場も不安定です。第3は家族福祉からの排除。親や子どもに頼れないこと。

第4は公的福祉からの排除。年配の人には「子どもに養ってもらえ」、母子家庭には「別れた夫から養育費をもらえ」、ホームレスには「住所がないと保護できない」―その人が生きていけるかにどうかに関係なく、追いつかず技法ばかりがまかりとおっている生活保護行政の問題です。

第5に「自分自身から」の排除です。4つの排除をうけ、自己責任論で「あなたのせい」とかたづけられ、本人も「自分のせい」と思いこんでしまうと何のためか、自分を大切に思えない状態、「死ぬから生きてる」ように自分を全否定してしまふ。

なんで野宿になったのかもよく話をしました。階段を踏み外して転げ落ちるように野宿生活になってしまふのはなぜかと。途中に「踊り場」があつてそこでストップできなかったはどうしてか。

最初に出てくるのは「家族」です。無職になって、金がなくなり、家賃もはらえなくなったときにもし家族の援助、帰れる家があればそこが「踊り場」になる。ところが野宿の人は家族と関係が切れてる。中高年だと特にそうです。田舎で実家が農業やつてるけど今さら帰っても農業じゃ食えなかったりするわけです。

それから野宿の人たちの55%が中卒なんです。いろいろな事情で高校にいけなかった。低学力のまま社会に出ざるをえなかった人が多い。仕事をしていて何かの事情で失職しても失業保険をもらうという知識、手続きも知らない。生活保護についてもそうです。野宿の人たちだけじゃなくて、ネットカフェで寝泊まりしてる人、DV被害の人、アパートに住んでる若者などともつきあうようになって話を聞くと基本的には野宿の人たちと共通の問題を抱えてるということがわかってきました。

―貧困におちいる過程には5重の排除の排除があるといわれています

湯浅 年齢、性別、世代を超えて多くの人たちが「滑り台」を落ちるように貧困状態に落ちてます。90年代

この5つが一人の人の上に折り重なって起こって貧困という状態になるんだということなんです。

―親の貧困、家庭環境の悪化による低学力問題は学校現場でも深刻です。

湯浅 教育課程からの排除というのは貧困の世代間連鎖の話ですよ。親が貧しいとか、自分の勉強部屋がないとか、いろいろ手伝わなきゃいけないとか、そういう中で勉強できる条件がお金の面でも生活環境の面でもない。宿題がでも家で教えてくれる人がいない。励ましたり。怒ってくれる大人もいない。高校に入れない、高校の勉強が全うできない、大学なんてとてもじゃないという中で早く社会に出ることになって、そうすると今度はいい職もないと。

モノあつかいされる労働者 ―企業福祉からの排除

いい職がないと低賃金で不安定な仕事になります。企業福祉からの排除といっているのは不安定で低賃金だということだけではないんです。この間派遣労働者の間でよく言われていますが、ちゃんと自分を尊重された扱いをされないと、もの扱いされるとか、うまく仕事をこなさないと罵声を浴びせられるとか、会社の都合でいいように首切りされるとか、労働してる間ずっと

とはじかれていくというか、疎外されている。

そういう状態で、支えてくれるはずの労働組合にもないとか入れないとか、そういういろんな意味での企業福祉ですね。住宅手当とか社員寮とかも含めて、そういうのは企業福祉からの排除です。

帰れる場所がない

家族福祉からの排除

仕事で不安定でも生活が不安定にはならない人というのでもいて、それが例えば親と同居しているフリーターとか、夫に十分な収入がある主婦パートとか、そういう人というのは仕事を辞めても生活はできるので、仕事も非常に有意義なラックスしてできるんです。

そういう家族の支えがないということになると、かなりせっぱ詰まる。で、仕事の不安定さが、そのまま生活の不安定さに直結してしまうんです。

私は、2003年に大学院を追い出されて、野宿の人たちと便利屋を始めたんですけど、収入は100万から200万円くらいで、私の生活が一番きつかった時期ですけど、やっぱり自分ではどっか楽観してた。何とかなるさと思ってた。

なんでかと、今ふり返って考えてみると、どうしようもなくなったら最後は実家に帰ればいいやと思ってたんです。アパートも引き払って実家に帰れば家賃も

諦めた生を生きることになります。このことを「自身からの排除」と名づけました。

金銭的にも、人間的にも、社会的にも貧しく、孤立した状態になる過程は今、申し上げた5重の排除があるというのが多くの野宿やネットカフェ難民の人たちとつき合ひ、その人たちとことん話し合った結果分かったことです。

人間の成長過程や社会生活の中で支えになったり、「危機」からのクッションになるセーフティネットからこぼれ落ちて貧困状態になる状態を「溜め」がなくなるという言葉で表現していますね。私もいわゆる「困難校」で長年、貧困ゆえの低学力、「意欲喪失」、中退する子どもと接しているので「溜め」がないという表現はすっと胸におちました。

溜めがないとは

湯浅 私は「貧困状態」におちいる人々の状態を「溜め」がない状態と表現しています。

「溜め」とは、「溜め池」の溜です。大きな溜め池を持っている地域は、多少雨が少なくても慌てることはないです。溜め池が小さければ少し日照りが続いただけで田畑が干上がり、深刻なダメージを受ける。「溜め」は外からの衝撃を吸収してくれるクッション

かかんないし、まあ食うもんはなんとでもなるし。

やっぱり実家に住んでいる月収10万と、一人暮らしして月収10万では同じ月収10万でも全然意味が違いますし、また、同じ一人暮らししている月収10万の中でも、いざとなったときに帰れる場所がある人の月収10万の一人暮らしと、いざとなってもどうにもならないという人の月収10万は意味が全然違うわけですね。そういうところで、家族のセーフティネットが効いているかないかというのはかなり大きな話だと思います。

最後は自分自身からの排除

それで、企業もダメ、家族もダメとなれば、あとは世の中の支えって公的なものしかないんですけど、それも効いてない。公的福祉からも排除されちゃう。てことになる、じゃあ、どうやって生きていけっというんだと、死ねってことかというふうな感じに追い込まれていきます。

人間は誰でも何らかの期待や願望をもちながら生きています。でも、生きる原動力となる期待や願望、それにむけた努力が挫かれ、どこにも誰にも受け入れられない経験をくりかえし続けると自分の「弱さ」と自分を拒絶する社会への怒りがどんどん溜まっていきます。それが暴発すると自殺にむかう。または何もかも

の役割をはたすともに、そこからエネルギーを汲み出す諸力の源泉にもなります。

「溜め」の役割を果たすものはいろいろです。貯金をもっている人は失業したり、病気になるってもあわてないですむ。次の求職活動費用ともなるからお金をもつことは「溜め」になる。溜めという抽象的な表現を使うのはそれがお金だけの問題ではないからです。頼れる家族縁者、友人がいるということは人間関係の溜めになる。親から教育費をかけてもらって学力やスキルをもち、自分に自信がある、がんばれる、自分を大切に思えるというのは精神的な溜めをもつことになります。

選択肢が奪われる

雇用・社会保険・公的福祉のセーフティネットに支えられているとき、家族のセーフティネットで支えられているときは、自らの生活が不安定でもその人たちは「溜め」がある。次の自立した生活、仕事を選ぶことが可能です。逆にそれから排除されたら「溜め」は失われ、最後は自分自身への信頼や自信を失ってしまう。

派遣労働や正規労働者でも今は低賃金でこき使われているから「貯金」をする余裕はない。金銭的な「溜め」がない状態で失職したら、その日から生活がで

なくなる。家賃も払えない。どんなに悪い条件でもすぐに働ける仕事をしなければならなくなります。職種や雇用条件なんかを選んでいる暇はない。月給制の仕事を選びたくても次の給料日までの生活費がないから日給・ピンハネが横行する日雇い派遣しか選べないのが現実です。

よく、派遣労働者は本人の選択だという人たちがいますが実態は「選択肢」を奪われているのが現状です。

—1990年代からのいわゆる「構造改革」「規制緩和・市場原理」「競争原理」でもたらされたものは「貧困層の増大」「働いても食えない人々」を生み出し、富裕層がさらに富を増やし、独占したということが最近鮮明になってきました。歴代の政府の新自由主義政策で人為的につくられた貧困ですね。

貧困を認めない、調べない政府

湯浅 2006年に竹中平蔵さんは「貧困が一定程度広がったら政策で対応しないといけない」が、社会的に解決しないといけない大問題としての貧困はこの国にはないと思います。」(2006年6月16日、朝日新聞)と言ってます。

なぜ、日本政府は貧困問題に向き合おうとしないのか。日本社会における貧困の広がりを認めなければ、

たのは2000年あたりからです。特に派遣などの「非正規社員化」リストラが進むなれと一致して子どもの貧困化が進みました。親の経済力や文化的な環境で子どもの学力、意欲の格差が顕著になってきました。

小泉時代にいつそう悪化しました。しかも低賃金や福祉・社会保障の劣化をつくってにおいて「貧困は本人の努力不足」——自公政府や財界は自己責任をやたらと強調します。

自己責任論では状況を変えられない

湯浅 いわゆる自己責任論は2種類あります。ひとつは現実や実態を見ない、見ようとしないうちに経営者や評論家の荒っぽい理屈です。当人の家庭状況とか、背景をみないで勉強しなかったから悪いんだとか、頑張れば正規雇用につけたはずだとかいいます。

若者の半分が非正規雇用にししか就けない雇用政策をつくりだしておいて、努力不足で非正規雇用になったという乱暴な自己責任論です。

もう一つはいろいろ援助の手を差し伸べてもなかなかのつてこない、意欲を示さないケースです。現場でやってくる人が直面する問題ですね。ケースワーカーであったり学校の先生であったり、私たちもそうですけど、そこでのうまくいかなさってというのが、一番最

貧困が生み出される社会構造はそのまま放置され、貧困はさらに拡大します。生活苦による犯罪、児童虐待を含む家庭内暴力、自殺が減ることなく、社会の活力はますます失われ、少子高齢化にも拍車がかかっている。ただちに大規模な実態調査を行い、その結果をふまえて対策をたてるべきときです。

しかし、まさしくそれゆえに、政府は貧困と向き合いたがらない。貧困の実態を知ってしまえば、放置することは許されないうから。

なぜなら、貧困とは「あつてはならない」ものだから。最低生活費以下で暮らす人が膨大に存在すること、それは一言で言えば憲法25条違反の状態です。国には、当然にその違憲状態を解消する義務が生じる。しかし、それはこの間の政府の「小さな政府」路線に根本的な修正を迫るものになります。

個人の自助努力不足のせい、自己責任、「働き方の多様化」で貧困になっているといえ国は1銭も使わないですむが、調査して貧困を認めれば、「憲法25条違反」になり、財政出動をせざるをえなくなる。だから、見たくない、隠したい——こうして、政府は依然として貧困を認めず、貧困は放置され続けています。

—高校でも授業料減免申請が急増したり、修学旅行の積立金が払えなくなったり、「現金」をもてない親、そこから子どもにかかわる余裕がない家庭が増えてき後まで残る自己責任論についていうことになるんですけど、まあ、結果的にはどう状況を変えるか、というところで考えるしかないんですよ。突き詰めていくと自己責任論の問題ではなくてしまふ。

意欲を喪失してしまったような態度をとり続ける人にとり付き合っていく問題で、その人の態度が変わらないから放り出しましたらある意味われわれの「負け」なわけですね。その人の自己責任だから放り出したら何も状況はかわらない後ろ向き姿勢です。

どう状況を変えるかっていうことです。そこに本当の意味ではソーシャルワークとかケアとかついているものの力量が問われるっていうことになるんですよ。

黙って抱きしめた

私の印象に残っているのは、スプラーさんというアメリカ人のジャーナリストですが、彼が『ワーキング・プア』という本を書いていてアメリカでベストセラーになったんです。

非常に貧困が見えているいい本なんですけれども、その中のひとつに、貧困地域に住む黒人女性に対してソーシャルワーカーがついて、彼女が就労支援として面接のセッティングをして、話をつけてこの日のこの時間に向こうさんが待っていてくれるから、必ず行く

んだよと、いう話しをした。

しかし、彼女は行かなかった。ただ、行かないかもしれないという不安はあって案の定いかなかった。で、その行かなかったということが分かったときに、このソーシャルワーカーは何したか、っていうのが書いてあるんです。

それは、「黙って彼女を抱きしめた」と書いてあるんですね。で、ま、その人にはなんで彼女が行けなかったのかという背景が分かるわけですね、そういうのが。

立ちすくんだり経験、状態とか経緯とかを理解して、まあ、そういう行為で迎えたわけですけど、そういうのが積み重ね繰り返されていつて、その人がバスに乗れるようになったり、面接に行けるようになったりする。

だから、自己責任論の問題は、結局解決策にはならないということですよ。状況を変えられないっていう。なのでそこをどれだけ自分たちの、ひいては社会の仕事として考えられるかということなんだと思うんです。

他に方法がない

湯浅 私たちが活動のなかで出会う人たちは、人並みにまじめで、人並みにいい加減でもあり、一生懸命暮

の家庭状況をとらえるなかで本人を支える取り組みをしないと先が開けない。しかし、今は学校で見られる「行動、結果、数値」でのみ判断してしまう傾向が強まっています。

ところで、湯浅さんは全ての人が人間らしく生きるには「貧困に強い」社会をつくることを強調していますが、貧困に強い社会は同時に「戦争への免疫力が強い」社会でもあるという指摘もしていて、すごく大切で今の時代状況にぴったりの指摘でした。

新自由主義は貧困を生み続ける

湯浅 この10数年間、強い社会は、新自由主義政策によってもたらされるといわれてきました。

あらゆる分野を民営化して、いわゆる市場原理、効率化、利益追求の場に変えるというのが柱の一つです。もう一つが規制緩和で小売業や農業で自由な競争ができるようにして効率よく利益をあげるほうが生き残れるとしてきました。

この考え方は教育の分野でも適用されています。ひとの生も効率で計られるようになってきました。スムーズに物事を進める快適さが最優先されて、不器用なこと、空気が読めないことが個性ではなくて人としての欠点となっていました。

しかし、「効率的なもの」が勝つということは自由

らそうとがんばってきた人たちです。でも、さまざまに不利な条件が積み重なった結果「生活できない」状態にいたって相談にきます。

「貧困に陥りやすい性格」なんてありません。存在しているのは人並みにまじめな人たちが様々な条件——経済力、人間関係、器用さ、自信など——に恵まれずに「他に方法がない」選択をせざるをえなくなつて、生きてゆけなくなるまでに追い込まれてゆく今の社会状況です。

所持金がほとんどゼロになるまで過剰に自助努力をぎりぎりまでしてきて、どうにもならなくなつて相談にきます。そこまでするまでに支えるセーフティネットがこわされてきた社会状況こそ変えなければならぬんじゃないか。

貧困状態にある人たちの存在は、社会自身の貧困——溜めのなさ——の現われであつて、それへの対処としての貧困対策が必要です。自己責任・自己努力の強調ではますます荒廃した社会に落ちていつてしまふ。

目の前の子どもたちの様子、行動の背景にあるものをみつめることはかなり疲れることです。でもそれをつめる努力をしなければ「貧困」はみえてこない。

学校現場でも日常的に経験していることです。やってこなければ「赤点」となることが分かっているのになぜ課題をやつてこないのか。その子の成育歴やいま

な競争を実現しません。資本が十分にあつて最初から優位な条件を持つ人たちが望ましい効率性を発揮でき、市場で勝ち残つて、さらに次の富をえるわけですから。教育もそうですよね。親のステータスで子ども的人生が決まることはいまや当たり前の現実ですから。

その結果生まれたのは「機会不平等」だし、セーフティネットの崩壊——滑り台社会、社会全体の貧困化、野宿者、「ネットカフェ」難民です。社会はちつとも強くなっていない。

戦争への免疫力

湯浅 貧困は戦争への免疫力を低下させる事実も出てきています。貧困大国アメリカでは軍隊がとくに貧困層の若者をターゲットにしています。「若者を戦争に駆り出すために、徴兵制や軍国主義イデオロギーよりも効果的な方法がある。まともに食べれない、未来を描けない、という閉塞した状況に追い込み、他の選択肢を奪つてしまえば彼・彼女らは『志願して』して入隊してくる」(堤未果氏、「貧困大国アメリカ」——岩波新書)と報告していますが、こうした状況は日本でも生まれてきています。

私のところには自衛隊の募集担当者から積極的なアプローチがあります。ターゲットは「もやい」に相談

にくるワーキングプアの若者たちです

日本も憲法9条―戦争放棄と憲法25条―生存権保障をセッテで考えるべき段階にきていると思います。

―最後に我々教職員へのメッセージを。

湯浅 子どもさんたちの置かれている厳しい立場は、今教師の人たちが置かれている厳しい立場とセットの問題だということですね。なので、その子どもの問題と仕事の問題が2つあるんじゃないかと、その問題は基本的にひとつのコインの裏表だと、いうことで、やはり両方やらないとどうにもならない。

だから職場を改善していくことと、それがひいては子どもがいきやすいっていうか、ちゃんと対応できる学校環境を作っていくことができるんだと。

「非正規になるな」はやめて欲しい
―生き抜く為の力を

それから、「非正規やワーキングプアにならないように」努力しましょうと、いうような言い方はやめてもらいたいと、それはもうどうやって、37・8%ですか、今、誰かは非正規にならなきゃいけない社会構造になってて、それを変えない限り、そんなこといから言ったって、それだけの人がなっちゃうわけですから。

それはあまりにも、仕事に、企業に依存しすぎだと思ふんで、企業はみんなの生活の面倒を一生見てくれるわけじゃないです。

だとしたら、もちろん仕事はそれはそれで頑張ればいいけど、仕事で生活できなくなったとき、あるいは仕事で生活の面倒見てくれなくなったときに、じゃあ、失業保険どうなっているのか、生活保護どうなっているのか、それも、そういうところを仕事と同じように、いろんな資源を動員するスキルですかね、そういうのを一度入れたいもらうと、かなり違うんじゃないかと。全く知らないですから、われわれのところに来る人たちは。

―親や時代を選べない子どもたちのためにも、職場で地域で「反貧困」のたたかいを今ひろげるべき時だということがよくわかりました。心にしみるお話を聞けて感動しています。



年越し派遣村村民の国会請願デモ、2009.1.5

さらに若者はほぼ50%は非正規ですよ、そうなる、あんなものになっちゃいけない、そういうものになってしまったと、また余計なレッテルを貼っちゃうことになるので、そういうことはやめてもらって、やっぱり生きるために頑張るっていう基本的なところを、なにかのために頑張るっていうのであれば、非正規にならないように頑張ろうじゃなくて、生きるために頑張ろうと、いうふうに言ってもらいたい。

そして、具体的なスキルを、一度でもいいから、ま、ちゃんと学ばないかもしれないけど、一度は、そういうやつと聞いたことあるぞくらいには入れておいてもらいたい。

たとえば、働ける人でも生活保護は受けられるんだとか、労基署へいったら申告に来ましたと言わなきゃいけないんだとか、アルバイトしたら本当は雇用契約書っていうのをもらえるんだとか、そういうようなほんと基本的なことですよ。明細ももらった雇用保険がついてるかどうか見てみるんだとか、そういう話ですが、まあ結局、人生の中で一度も聞かないなかで、トラブルに見舞われちゃうと、もうなすすべがないんです。

みんなどうやって就職するか、就職面接のためのスキルは磨くけど、でもじゃあ、就職面接でうまくいなくて生きていけなくなったらどうすんだっていう、そこは一切ノーガードだっていう、ことですよ。